

# 「半栽培」という自然との関わり

琵琶湖博物館 主任学芸員 牧野 厚史

## 注目されはじめた

### 半栽培植物

人類学や環境社会学の研究では、最近になって、自然と人間との関係の持ち方を記述したり説明したりする際に、しばしば「半栽培」ということばを使うようになった。半栽培とは野生の植物と栽培作物との間にある植物のことである。また、動物についても「半家畜」ということばが使われる場合もある。

では、半栽培植物とは、どのようなものだろうか。また、その利用は、どのような自然との関係の持ち方を人間にもたらしめるだろうか。本来は琵琶湖の周りの事例によって説明することが望ましいが、日本での半栽培の研究はまだじまったばかりである。そこで、さまざまな地域の例をみながら課題にせまっていくことにしよう。

## 栽培植物の起源

そもそも半栽培という概念を提起したのは、植物学研究者の

中尾佐助である。栽培作物起源論と呼ばれる、その考え方を要約すると次のようなものになる。

トウモロコシやイネなど、現在の農業で栽培されている作物は、人間が野生の植物を品種改良することによってできた植物だ。したがって、その途上には、野生の植物とはいえないが、今の栽培作物とも異なった、半栽培段階にある植物の存在が想定される。それらをたどっていけば栽培作物の起源や伝播ルートがわかるはずだ、と中尾は考えた。これはこれで興味深い考え方である。

## 今も使われている

### 半栽培植物

ただ、人類学や社会学という、現在の人々の生活を扱う研究者たちが半栽培に関心を向けるようになったのは、過去の植物に注目したからではない。今の人々が利用している植物

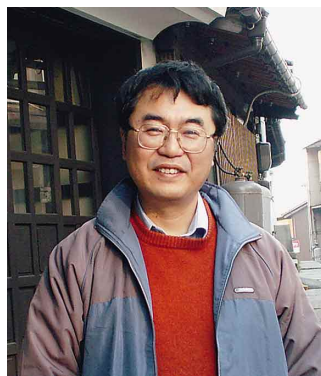
のなかにも、「半栽培」状態と

しかいいようのないものがあることを現場でみつけたからである。その先鞭をつけたのは、日本のような産業化された社会の研究ではなく、ソロモン諸島やネパールなどの農村における自然利用についての研究だった。

たとえば、環境社会学研究者の宮内泰介は、ソロモン諸島における人々の自然との関係の持ち方を研究し、サゴヤシをはじめ、さまざまな「半栽培」状態にある植物が生活に利用されていることを紹介した。それは次のような利用の仕方だ。島の人々にとってサゴヤシは、屋根材や食物を包むために使われる重要な植物である。「サゴヤシや竹を『栽培』というには多少抵抗がある。

確かに、植えるものであり、その時点で所有が決まる。しかし、そのあと、特別に何かケアするわけでもない。つまりほったらかしである」と宮内はいう。

ここには、手間暇をかけず



に有用な成果をもたらしてくれる「半栽培」植物の特色がよくでている。これはこれで興味深い事実だろう。

## 社会関係や

### 土地利用のルール

ただ、「ほったらかし」という表現には、少しばかり注釈が必要だ。

なぜなら植物を植えている土地は、実は、植えた人々の土地ではなく、別の人の所有地だからである。考えてみよう。もし、現代の日本で、マンションのような集合住宅の敷地の一角に、そこが適当だからといって、実のなる樹木を誰かが植えたとしたらどうなるだろう。そんなことをすれば、

トラブル発生のもとになりかねない。まず、木になった果実とは誰のものかが問題となるだろう。また、その土地に勝手に木を植えてよいかを問題にする人もできかねない。

トラブル発生をさけて半栽培状態の植物を利用するため

には、それなりの社会関係や土地利用のルールが必要なのである。

## カワウという鳥類の利用

では、半栽培に必要な社会関係や土地利用のルールとはどのようなものだろうか。

日本の自然利用の中から例をだして考えてみよう。その例とはカワウという鳥類の半家畜としての利用である。

家畜としてのウの利用というと、鶏飼いを思い浮かべるかもしれない。だが、日本の鶏飼いで利用されるのは、ウミウである。カワウは、今の日本では、むしろ害鳥として注目されることが多い。漁業での被害の他、集団で森林に営巣して樹木を枯損するからだ。滋賀県でも、アユなどへの被害や、竹生島などでの森林枯損の問題が注目を集めるようになってきている。

しかし、その糞はリン、窒素に富むことから、農業に肥料として糞を用いていた地域がある。愛知県美浜町の天然記念物「鶺鴒の山鶺鴒繁殖地」を抱える上野間地区もその一つである。高度成長期頃まで行われていた同地区での糞採取とは、次のようなものであった。

まず、カワウが営巣している松の木の下に、山砂をまいておき、そこにカワウが落と



愛知県美浜町の山鶯繁殖地の現況



す糞をしみこませる。この糞がしみこんだ砂を集め肥料として利用するのである。化学肥料が普及していなかった当時、手軽に入手できるカワウの糞はすぐれた肥料だった。また、それは地区の財政を豊かにもしたのである。

### 人が用意する営巣場所

ただ、このようなうまい鳥類の利用法を継続するためには、森林の手入れが必要だった。というのも、カワウが営巣する松の木は、営巣によってやがて枯死するからだ。適当な樹木がなくなればカワウは同じ場所にとどまってはいない。そこで自分たちに都合のよい場所にカワウを営巣させ糞の採取を続けるためには、営巣が可能な松の木を人間たちが植えていく必要があるためである。そのためには、森林は村人が共同で利用できる土地でなければならなかった。森林は昭和9年（1934）に天然記念物になる。だが、天然記念物になってからも村人の利用の仕方は変わらなかった。村人は、植樹のための人手や資金を捻出し続けたのである。

このようなカワウとの関係の持ち方は、半家畜としてのカワウの利用と見なしてもよいであろう。

### 人と自然との関わりを みなおすヒント

半栽培（半家畜）という自然との関わり方に注目することで見えてくるものとは何だろうか。分野によっても違ってくるが、社会学にとっては、自然と人間との関係を見直す契機となることだ。

これまでの研究では、人間による自然の変形と利用という側面だけが強調されがちだった。そのためであるうか、ときに、自然を利用することそのものがよくない、という極端な意見もだされることになった。

半栽培という自然との関わり方には、動物や植物という生命体を完全にコントロールすることなどはできないし、またその必要もない、という考え方が含まれている。手間暇かけずに成果がえられる半栽培（半家畜）には、自然の側の要請にみあった社会関係や土地利用のルールづくりが必要となるからだ。カワウの糞利用で言えば、鳥類の都合にあわせた森林の土地利用や樹木の管理が必要となるのである。また、この事例では、「むら」という社会関係の存在が注目される。このような半栽培という営みは、自然環境

の保全という発想が強くなった、現在の琵琶湖のまわりの植物や動物との関わり方を見直すためのさまざまなヒントを与えてくれるのである。

#### 参考文献および注

- (1) 人類学には多数の文献があるが、社会学および社会学に強い影響を与えた文献のみに限定して紹介しておく。松井健（1989）『セミ・ドメスティケーション…農耕と遊牧の起源再考』海鳴社
  - 古川彰（2001）『自然と文化の環境計画』『半栽培』と『放置管理』の思想。鳥越皓之編『自然環境と環境文化』（講座環境社会学3）有斐閣
  - 宮内泰介（2001）『住民の生活戦略とコモンス』ソロモン諸島の事例から。新曜社
  - (2) 中尾佐助（2004）『中尾佐助著作集 農耕の起源と栽培植物』北海道大学図書刊行会
  - (3) 注1の文献参照。
  - (4) 牧野厚史（2007）『農村村の動物をどうするか』鳥越皓之編『むらの社会を研究する』フィールドからの発想。農山漁村文化協会
- 同地区の森林が「鶯の山鶯繁殖地」として天然記念物指定を受けたのは、昭和9年（1934）である。愛知県内務部の当時の報告書では糞採取の実態が詳細に紹介されており、天然記念物と村民による糞採取の両立は当然のことと見なされていたことがわかる。
- また、この村では採取した糞の利用を村人の入札によって決め、その収益を村の財政に組み込んでいた。